

「全世界に出て行って」

ホセア書
マルコによる福音書

第6章 1節～3節
第16章 15節

説教 岡村 恒牧師

主の年(A.D.)2014年を迎えました。この新しい年は、主なる神が、特別な憐れみと恵みとをもって、私たちにお与え下さった特別な時です。私たちが勝手に、まるで当然所有している自分自身のものであるかのように、この時を浪費することはできません。私たちは生まれながらにして罪人であり、神がお造りになった世界を破壊し、隣り人を傷つけ、神を拝むことをしないで生きる者です。しかし神は、この私たちを愛して、一人として滅びることがないように、ひとり子、主イエス・キリストを地上にお遣わし下さいました。私たちが悔い改めて、神の元に帰り、神のものとして生きるようになるためです。神には何ひとつ欠けたものはありません。私たちが何ごとかをなし遂げないと、神が満たされないというではありません。私たちを取り戻して喜ぶために、神の喜びのためにこの時が与えられているのです。

今朝、2014年の標語聖句が与えられました。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」(15節b)主イエス・キリストの弟子たちは、主が復活されたという知らせを信じるのができませんでした。その弟子たちの前に現れて下さった主イエスが、まさに、信じるのができない弟子たちに向かって語られたのがこの言葉です。

神から私たちに「福音(良い知らせ)」が伝えられました。この知らせを聞くだけで、私たちの心が喜びで震えるような良い知らせです。聖書全体が、ただ神からの良い知らせを聞くように、と私たちに語りかけています。ところが弟子たちは、良い知らせを信じるのができませんでした。婦人たちの言葉や、エマオから帰ってきた二人の弟子たちの知らせを聞いても、弟子たちは、信じなかったのです。さらにこの後、復活された主イエスに直接お会いしても、弟子たちは主の復活を人々に宣べ伝えることができませんでした。復活された主イエスに出会ってもなお、死人の復活や神の恵みによる救いを信じるのができなかったのです。ペンテコステ(聖霊降臨祭)に弟子たちに聖霊が降って、主の復活を信じる信仰を与えられるまで、どうしても宣べ伝えることなど出来ませんでした。これが、弟子たちのそして私たちの現実です。

不信仰でかたくなな弟子たちを、主イエスは「お責めになった」(14節)と聖書は記します。

主イエスは弟子たちの不信仰に怒り、ののしられたのでしょうか。もしそうなら、つまり私たちがどんな時にも揺らぐことのない確かな信仰を持たねばならないのだとしたら、私たちには全く希望がありません。

聖書は、私たちに「不信仰な者の救い」を伝えます。神の言葉を聞いたらすぐに信じて、決して疑うことや、御言葉に反して歩むことなどない信仰深い弟子たちの救いの話ではありません。どうしても信じるのができない弟子たちの救い、不信仰な者の救いを、聖書は福音と呼ぶのです。「イエスは…彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。」(14節)私たちは、主イエスに出会って、自分自身の罪をはっきりと指摘されるまで、気づくことも認めることもできない者です。主イエスの光に照らされて初めて、私たちは自分自身が、神に愛されることなどあり得ない存在、赦されざる者だということに気づかされます。

主イエスは、このような私たちに赦しを与えるだけではなく、神の国の福音を携えて宣べ伝えるという尊い使命をお与えになります。「全世界に出て行って」とお命じになり、神がお造りになったこの世界、私たちの隣り人、自分自身の心の闇にまで出かけて行って、良い知らせを宣べ伝えよと言われるのです。私たちひとりひとりをお造りになり、招き、赦しと命とを与え、使命を与えて下さる神が、私たちをお用い下さるために派遣して下さいます。この礼拝のただ中で、もう一度新しくご自分のものとして私たちを取り戻して下さい、新しく造り変えて送り出して下さるのです。

マルコによる福音書の冒頭には、主イエスの最初の説教が記されています。「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」(1章15節)神の支配がこの世界を包み込んでいるから、方向転換(悔い改め)をして良い知らせを信じて歩んだら良い。主イエスはそう語り始められました。そして復活の後、弟子たちに、そして今ここにいる私たちに、この良い知らせをお委ねになりました。

神は、弟子たちにそうなさったように、私たちにも聖霊を注ぎ入れ、この一年も、神の国の御用のためにお用い下さいます。神ご自身の喜びのために、良い知らせを宣べ伝える器として、私たちを祝福して下さいます。

(記 岡村 恒)